

# じんけん瓦版 第71号

発行日：2018年11月11日

発行：日本聖公会東京教区 人権委員会

## 2018年 管区人権セミナーに参加して

佐々木紀久江（葛飾茨十字教会信徒）

9月11日より3日間にわたり、「いのちと尊厳」をテーマに、管区主催の人権セミナーが、中部教区の企画により、長野県で開催され参加しました。

一日目は、「社会福祉法人小諸学舎」学舎長の小松敏幸さんが「一<sup>いちこう</sup>なる思い～小諸学舎の実践から」と題して講演されました。

小松さんは、軽井沢ショー記念礼拝堂の信徒の方で、「この子らに光を」「地の塩」等の聖書の言葉を福祉の原点とし、知的に障害のある人達の、いわれのない差別や偏見をなくし、支え手、受け手という関係を超えて暮らしやすく、命の尊厳が守られる「地域共生社会」を目指して日々がんばっておられます。



小諸学舎は、市民運動として、「無告の民（自らの苦しみや悲しみを訴え、救いを求めることができない民）に温かい手を差し伸べることは社会の責任である」を原点として実践しているとのこと。知的に障がいのある人々に寄り添い・支え合いながら運動を始めて50年近くが経過しました。憐れみや憐憫の情が湧いたときにのみ人間的な生活が許される現状を憂い、黙っておられなくなった者が立ち上がり運動に加わり、互いの思

いを伝えあいながら実践を始めました。しばらくして、障害のある人々と寄り添った人々は共に、本当の意味で自由な生活ができていない時代に生きている仲間であることに気付き、さらに、交わりを深める中から、知的に障がいのある人々との関わりから、より多くの真実に気づかされてきたとのこと。

差別や偏見をなくすためには既成の価値観に当てはめるとうまくいきません。国の社会福祉制度は3年変わりで継続性がありません。小諸学舎の実践から、新しい価値観を作るためには50年で緒に就いたところで、100年スパンの息の長い取り組みが必要になると話されました。

この息の長い実践を継続するためには何が必要か考えた結果が「小さな存在である一人ひとりを一<sup>いち</sup>の思いで見つめ・励まし・支え合い、彩り豊かな暮らしを創造する」という基本理念になったとのこと。

小諸学舎では、福祉系大学や他施設から研修生を受け入れます。社会福祉について、大学は何をするかは教えるが、何のためにするかは全く教えていません。命の大切さは、勉強では覚えられません。どうやって学習、実践で身に付けさせるのかというのが、この施設の役割だと思っているとのこと。命の大切さは頭で覚えて分かるというものではなく、研修生には、まず聖書を読むことを薦めていると伺いました。聖書は、宗教としてではなく、福祉の原点が書かれているから、まず読みなさいと薦めているとのこと。

いわれのない差別や偏見は、国の優生思想がもたらしており、相模原殺傷事件、本人不同意の不

妊手術問題、障害者雇用の水増し問題などもリンクしているとの指摘がありました。

翌日、実際に小諸学舎を見学、間近にお部屋や食堂、日々の活動の様子を見学しました。入居者の一人が近寄ってきて、手を差し伸べ、握手を求めてこられ、手を握った時の笑顔が忘れられません。指導されている方々、生活されている障害者の方々の姿を間近にし、小諸学舎のモットーである『「無告の民」に温かい手を差し伸べることは、社会の責任である』が実践されていることを肌で感じることができました。小さくされている、一人一人に目をとめていくことの大切さを改めて実感させられた時でした。

二日目午後は、「松代大本営」跡をフィールドワークしました。松代大本営とは、長野市松代町の三つの山の地下に分散して作られた地下軍事施設群のことです。

今回のフィールドワークで、沖縄戦が全島民を巻き込む持久戦に持ち込み、米軍を一日でも長く沖縄に釘付けにする作戦で、20万人もの死者を出す凄まじい戦争になった原因が、この大本営移転工事に密接につながっていたということを知りました。

太平洋戦争末期、敗色濃厚だった当時、軍部は本土決戦を行い、連合国に最後の打撃を与え、和平条件に「天皇を頂点とする国家体制の維持」を得ようと考え、この決戦の指揮中枢のためのシェルターとして松代大本営が計画されたとのことでした。松代大本営の地下壕には、皇居、政府の諸官庁主要部、NHKなど、天皇制国家の中枢機関がまとめて移転する計画でした。6000人とも7000人ともいわれる朝鮮の人々が徴用され、松代での大本営移転工事に従事させられました。秘密裏に行われた工事は、約9ヶ月で全長10キロ以上にも及ぶ地下壕を建



朝鮮人犠牲者追悼の碑

設するという、驚異的なもので、1日10時間以上も過酷で危険な労働に従事させられ、事故の犠牲者も相当あったといわれています。凄まじい沖縄戦は、この松代地下壕が完成するまでの時間稼ぎだったのです。大本営移転工事を完成させるために、沖縄は捨て石にされたのです。また、慰安所が設けられ半強制的に借り上げられた民家に朝鮮の女性が連れてこられました。その女性たちもまた、この工事の犠牲者でした。沖縄のひめゆり学徒隊の方々が見学に来られ、「沖縄で私たちが血まみれになっているときに、こんな凄い壕を準備していたなんて…」と絶句し岩壁を叩いて泣く方もいたといえます。

二日目夕食後のプログラムは、「病み棄ての戻り道」と題して伊波敏男さん（信州沖縄塾主宰、作家、ハンセン病回復者）の講演がありました。

伊波さんは、沖縄生まれで14歳のとき医師から突然ハンセン病の告知を受け、沖縄愛楽園に隔離されました。愛楽園には高校がなく、勉学心強い伊波さんは、岡山県にハンセン病の高校があることを知り、父に救いを求め、真夜中に脱走して、長島愛生園内の高校を卒業後、東京の専門学校で学び、「ハンセン病回復者を名乗り」活動されています。結婚し子どもにも恵まれましたが、社会の偏見と差別は厳しく、ハンセン病政策の誤りやハンセン病回復者への人権の不当な扱いを訴えれば訴えるほど、その反動は、家族の上に跳ね返ってきました。奥様は多磨全生園の看護師で、同園には職員と近隣者が利用する組合系の保育園がありました。奥様が妊娠、産休に入ると労働運動のひとたちが「私たちがやっと作った保育園に子供を入れるのは許さない。あなたの子供が利用すると、皆さん退園していくので経営が成り立たなくなる。あなたのエゴで園をつぶすのか」と奥様は責められたとのことでした。奥様は、「もうハンセン病と名乗らないで欲しいと」と訴えましたが取り合わなかったため、「私達を探さないでください」という置手紙と離婚届けを置き、家族は消えてしまったとのことでした。

最後に、「国民の無関心でハンセン病患者たちは人生と故郷を失った。国民に刷り込まれた偏見がいまだに差別を生んでいる。」と問いかけられ、

旧ソ連の作家、ブルーノ・ヤセンスキー（「無関心な人々の共謀」）の次の掲句をいただきました。

敵を恐れることはない…敵はせいぜい君を殺すだけだ。 友を恐れることはない…友はせいぜ

いきみを裏切るだけだ。 無関心の人々を恐れよ…彼らは殺しも裏切りもしない。

だが、無関心な人々の沈黙の同意があればこそ、地球上には裏切りと殺戮が存在するのだ。

## 「仙台北陵クリニック・筋弛緩剤冤罪事件」について

この事件は、2001年1月に、仙台市の北陵クリニック病院の准看護師の守大助さん（当時29歳）が、5人の入院患者の点滴に筋弛緩剤を混入したとして殺人・殺人未遂の罪で逮捕され、2008年最高裁で無期懲役刑が確定した事件です。現在千葉刑務所で服役しながら無実を叫び続けています。

当時、メディアで大々的に「殺人鬼」のように報道されたことを覚えておられる方も多いでしょう。しかし、守さんは一貫して無実を叫び続け、2012年2月に獄中から再審申立を行います。

仙台高裁は、2018年2月28日に、弁護側の即時抗告を棄却する決定を行いました。高裁判断は、一方的に検察の主張に寄りかかり、正確な理解も正当な根拠もなく否定したものです。即時抗告申立から4年もあったにも関わらず、弁護側が再三求める証人尋問や証拠開示にも応じず、実質的な審理は何も行

われないままの決定でした。

守大助さんと弁護団は、最高裁判所に特別抗告しました。最高裁で「差し戻し」決定が行われ、再審開始が行われることを求めています。

えん罪は、一人の人生を破壊してしまいます。人間として、キリスト者としても、これ以上無実の守大助さんを拘束するのは甚だしく不正義だと思います。

検察の手持ち証拠を全面開示すべきです。1日も早く再審開始が行われるよう求めます。無実の守大助さんの尊厳が回復されますように！

守大助さんを支えるため、詩文集「僕は無実です」の増補版を出版しました。みなさまのご支援を心からお願い致します。

東京教区人権委員会・一羊会 一同

### 守大助詩文集増補版より

#### 2018年も春が来ませんでした

2018年こそ 本当の春が来ると 信じていた  
裁判長を信じた 僕は バカだった  
無実の者は どこへ訴えればいい  
4年間 本当の春が来ると信じて 耐えた  
真実が 照らされないなんて おかしい  
今回の決定は 絶対に 許されません  
無実の訴え聞かない 無実の証拠を見ない  
証拠開示・証人尋問しない  
裁判長は 人権派じゃない  
良心も 正義も 勇気もない ヒラメ裁判官  
今度こそ 本当の春が来ると 信じたい

#### 祈り

もうこれ以上の 辛い生活は たくさんだ  
いったい いつまで 無実の僕を  
ここへ 閉じ込めているのだろうか  
真実が照らされると信じて  
真実に光を！！  
必ず 照らされると 信じて  
今日も 祈る

\* 守大助さん住所

〒264-0023

千葉市若葉区貝塚町 192

## 第24回 世界エイズ・デー記念礼拝



カトリックHIV/AIDSデスクロゴ

～PWH/AIDSの方々が生の尊厳を確信できるように、  
また AIDS で亡くなられた友を覚え、ともに祈り、  
交わりの回復を願って～

日時：2018年11月25日（日）17：00から

場所：牛込聖公会聖バルナバ教会

メッセージ：大塚隆史さん

（造形作家／バー・タックスノット店主）

共催 東京教区人権委員会

カトリック中央協議会HIV/AIDSデスク

宗教とLGPTネットワーク

ルーテルHIV/AIDSプロジェクト

問合せ 人権委員会 佐々木 (090-8593-6129)

世界エイズデー記念礼拝は1995年から毎年、世界エイズデー（12月1日）に近い日曜日に行っています。今年のメッセンジャーには、日本のLGBTシーンを見守り続けてきた大塚隆史さん（造形作家／新宿 バー・タックスノット店主）をお迎えしています。どなたでもお越しください。

### 大塚隆史さんプロフィール

その昔、一世を風靡した『スネークマンショー』に参加し、ゲイのポジティブな生き方をリスナーに向けて発信。これに影響を受けたゲイは数知れず。その後は造形作家として活躍中。近年ではエッセイや翻訳等の執筆活動も盛ん。別冊宝島のゲイ三部作『ゲイの贈り物』『ゲイのおもちゃ箱』『ゲイの学園天国』を責任編集。訳書に『危険は承知／デレク・ジャーマンの遺言』（アップリンク・河出書房新社刊）、著書に『2丁目からウロコ』（翔泳社・刊）、『二人で生きる技術—幸せになるためのパートナーシップ』（ポット出版・刊）がある。1982年、バー「タックスノット」を新宿に開店。若いゲイの（そして若くないゲイの）良き相談相手として幅広い支持を得ている。

\*\*\*\*\*

### 2018年人権文化セミナー連続講座・第3回

東京・墨田区の皮革生産と油脂産業の街・フィールドワーク

日時 2018年11月17日（土）9：30～13：00

場所 産業・教育資料室きねがわ

集合場所 9：30／京成線「八広駅」・2階改札

主催 日本キリスト教協議会部落差別問題委員会

問合せ 03-6302-1919